

京都福音特別集会

旧約の福音

――詩篇第103篇――

1993年5月15日

小池辰雄

無相の相 無的実存 本当の現実ではいやされている 贖われたところに聖霊が来る 無き者
出我 旧約の福音 エホバに平伏す者

【詩篇103】

ダビデのうた

- 1 わが^{たましひ}靈魂よ、エホバをほめまつれ、
わが衷^{うち}なるすべてのものよ、そのきよき名^{みな}をほめまつれ。
- 2 わがたましひよ、エホバを讃^{ほめ}まつれ、
そのすべての恩恵^{めぐみ}をわするるなかれ。
- 3 エホバはなんじがすべての不義をゆるし、
汝^{やまひ}のすべての疾^{やまひ}をいやし、
- 4 なんじの生命^{いのち}をほろびより贖^いいだし、
仁慈^{いつくしみ}と憐憫^{あわれみ}とを汝^{やまひ}にこうむらせ、
- 5 なんじの口^{くち}を嘉物^{よきもの}にてあかしめたもう。
斯^{しか}てなんじは壮^{わかや}きて驚^{おどろ}のごとく新^{あらた}になるなり。
- 6 エホバはすべて虐^{しいた}げらるる者のために
公義^{ただしき}と審判^{さばき}とおこないたもう。
- 7 おのれの途^{みち}をモーセにしらしめ、
おのれの作^{しわざ}為^{わざ}をイスラエルの子輩^{こら}にしらしめ給えり。
- 8 エホバはあわれみと恩恵^{めぐみ}にみちて
怒^{いか}りたもうことおそく仁慈^{いつくしみ}ゆたかにまします。
- 9 恒^{つね}にせむることをせず
永遠^{いだい}にいかりを懷^{いだ}きたまわざるなり。
- 10 エホバはわれらの罪^かの量^{かさ}にしたがいて我等をあしらいたまわず、
われらの不義^{ふぎ}のかさにしたがいて報^はいたまわざりき。
- 11 エホバをおそるるものにエホバの賜^{たま}うそのあわれみは大^{おほ}いにして、
天^{そら}の地^ちよりも高^{たか}きがごとし。



12 そのわれらより愆^{とが}をとおぎけたもうことは
東の西より遠きがごとし。

13 エホバの己をおそるる者をあわれみたもうことは
父がその子をあわれむが如し。

14 エホバは我等のつくられし状^{さう}をしり、
われらの塵なることを念^{おも}い給えばなり。

15 人のよわいは草のごとく、
その栄えは野の花のごとし。

16 風すぐれば失せてあとなく
その生^おいいでし処にとえど尚^{なお}しらざるなり。

17 然^{しか}はあれどエホバの憐憫^{あわれみ}はとこしえより永遠まで、
エホバをおそるるものにいたり、

その公義^{ただしき}は子孫のまた子孫にいたらん。
18 その契約をまもり

その訓諭^{みさとし}を心にとめて行^なうものぞその人なる。
19 エホバはその寶座^{みくら}をもろもろの天にかたく置^{すえ}たまえり、
その政權^{まつりごと}はよろずのものうえにあり。

20 エホバにつかうる使者^{つかい}よ、
エホバの聖言^{みことば}のこえをきき、

その聖言をおこなう勇士^{ますしい}よエホバをほめまつれ。
21 その万軍よ、その聖旨^{みことば}をおこなう僕等^{しもべら}よ、

エホバをほめまつれ。
22 その造^{つく}りたまえる万^{よろずのもの}物よ、

エホバの政權^{まつりごと}の下なるすべての処にてエホバをほめよ、
わがたましいよエホバを讃^ほめまつれ。

23 天ようたえエホバこのことを成したまえり。
下なる地よばわれ、

もろもろの山よ林およびその中の木よこえを^{はな}発ちてうたうべし。
エホバはヤコブを贖^{はな}えり。

イスラエルのうちに栄光をあらわし給わん。

●無相の相

戦争の時に、零戦という飛行機があった。低空飛行する。私も低空飛行なんです。よく、集会が終わった後で、「お疲れさま」と仰つてくださるが、私はさっぱり疲れない。集会し



ていると、終りにいくほど、聖霊の力が強くなってくるものだから、集会が終わると、全身がみ霊で満ちているわけです。疲れるどころの騒ぎではない。だから、「お疲れさま」なんて仰らないでください。

無教会の先生方が集会の後で疲れて、

「月曜はもぬけのからになる」

なんて仰る。それはご自分の聖書研究でものを仰るから、そういうことになる。研究では立派なことをおっしゃいます。私は聴いていて、

「今日はつまらなかった」

なんて思うこともない。けれども、魂が本当に揺り動かされたという経験は、私は無教会時代に持たなかった。それは聖霊の働きのないからです。

聖書は創世記から黙示録まで神の霊の働きの書です。

「^{はじめ}太初に言あり」

とあるけれども、あれは霊言で、単なる言ではない。

そういうことで、ありがたくてしょうがない。私はキリストに圧倒されて生きている。それだけの話です。それが、恵みと言えば、恵みなんです。それでなければ、私は生きようがない。

パウロが使徒行伝の17章で、アレオパゴスで演説した時に、

「我らは神の中に生き、動きまた在るなり」

と言った。これはゲーテが好きな言葉です。ゲーテという人はいわゆる十字架の信仰ではありませんけれども、本当に神の生命の中に――神と自然がゲーテでは融合していますけれども――その中に生き動きまた在るなり、というひとでした。

「人間は神の似姿である」

という言葉があります。あの「似姿」という訳は感心しない。

「セレム・エロヒーム」

といって、神の相に^{すがた}即している即如の世界なんです。「神の相」とは何ですか。これは分からない。神さまは「無相」です。相が無い。誰か神さまを見たですか、誰も見ない。この無相の神さまを相にしたのがキリストなんです。「無相の相」の相はキリストです。この無相は相を超越した無です。神の知識も知識を超えた、「超智」です。「エピグノーシス」というのはそういう字です。「知識」と時々書いてあるのはみな超智、天来の知識です。だから、人の未だ聞かざるところ、そういうのがこの福音の世界なんです。神さまの言は全く「霊言」です。

私たちは、直接に「神の中に」ではない。

「キリストの中に生き、動きまた在るなり」

です。でなければ、本当の在り方ではない、あり得ない。自分で分かる。そうでなかったら、



ダメになることが。まあ、人間だから、いろいろ波はあるでしょう。しかしながら、波や雲の上の世界、そこから雲を破つてみ力がくるからありがたいと、こういうわけです。

●無の実存

詩篇103篇を『旧約の福音』と題しました。この詩篇103篇というのは素晴らしい。

「詩篇」というのは、本当は良い訳ではない。「讚美歌集」なんです。ヘブライ語の「テヒリム」というのは、「ハーレル・ヤー」の「ハーラル」という字が原語になっているので、「讚美歌集」なんです。全部これは讚美歌です。神を讚美することが人生の目的です。実存をもつて讚美する。ただ口ばかりでない。生活そのものをもつて讚美する。

「わが靈魂よ、エホバをほめまつれ、

「ほめまつれ」でもいいが、

「讚美せよ」

とはつきり言った方がいい。だから、私たちも讚美歌を歌うことは非常に大事です。或る集会は讚美歌ばかり歌っていたって構わない。みんな一緒に讚美しましょうと。

「魂」は、

「魂之靈」

と書く。「たましい」ではなく、「たましひ」と書かなくては意味をなさない。キリストの靈を受けるのを受靈という。

「キリストの靈をもたざる者はキリスト者に非ず」

とパウロはローマ書でちゃんとつきり言っている。

わが衷なるすべてのものよ、そのきよき名をほめまつれ。

五臓六腑全部、いや、五臓六腑どころではない、全身で讚美する。詩篇103篇はもうこの第1節が、ベートーヴェンのグワーツとくる音楽の最初のもの凄い音と同じで、この第1節だけで、それでもうお終いと言つてもいいくらいです。

人生ではいろいろなものにでつくわす。いろいろなものにでつくわして、現実がうまくなければならないほど逆に、「讚美せよ」という。詩篇103篇のこの最初の1節は素晴らしい。聖名は、私は旧約を読む時には、「エホバ」はみな「キリスト」になつてしまう。キリストの聖名というのは実力を持っている。ペテロもパウロもヨハネも、キリストの聖名を實力として持っている。生まれつきの跛者に、

「わが中にあるものを――キリストの聖名を――与える。聖名にありて起き

よー」

と言つたら、彼は立ち上がってしまった。ペテロの中にキリストの聖名の実力が充滿しているから。

「自分の信仰ではない。キリストがなされた」



とはつきり言っている。私は、あのペテロの無的実存は非常に好きなんです。自分を何かと思っているうちは、正直ダメです。

ところが、こういうことはヨーロッパの人にはなかなか分からない。「ニッヒツ」なんて言う、「何も無いことか」と思う。そうではない。「アッレス オーダー ニッヒツ」「オル オア ナッシング」ではなくて、

「ニッヒツ イスト アッレス」

「ナッシング イズ オール」

なんです。こちら側が無になると、一切のものがやってくる、キリスト一切が来たりたもう。もう私の構造はそうなってしまうっているから、しょうがない。パウロが、

「我れ弱きときに強し」

と言ったが、弱きどころではない。

「無力なる時に強し」

です。相対的な判断ではない。絶対判断です。

とことんの所へ行かないと、私の魂は承知しないんだね。「まあ、この辺で……」なんてのは承知しない。

信仰ではない。現^{うつ}だ。「今ここにおいて」という世界だ、現実だ。私は昔から現実という

言葉が好きなんだ。藤井先生が、

「現実主義はダメだ、理想主義でいけ」

と言った。それは観念の世界なんです、

「現実がダメで、理想がいい」

と言っているうちは。理想なんていらぬ。

「現実が本ものであるか」

それだけが問題です。うつつの世界が本ものであるか。そのためには、キリストをいただくかなければ、本ものになれない。

● 本当の現実ではいやされている

詩篇103篇は旧約の福音みたいです。

2 わがたましひよ、エホバを讃^{ほめ}まつれ、

そのすべての恩恵^{めぐみ}をわするるなかれ。

「すべての恩恵^{めぐみ}をわするるなかれ」

とある。皆さんもご自分の生涯でいろいろな恵みを思いだすことでしょう。しかし、すべての恵みのうちの三日月みたいなもので、これしか思い出せない。

「それではしょうがないではないか」

なんて。いいんですよ。この三日月は満月を抱いている三日月です。上弦の月、満ちゆく



三日月です。どうせ、人間は地上では満月ではない。私なんかはせいぜい三日月くらいなものだ。けれども、満月が約束されている。約束されているところではない、満月を既にこの三日月は抱いている。質的に満月なんです。三日月が質的に満月。だから、人生はどこで終わってもいい。皆さんが本当に生きていけば、いつ仆れても

「アーメン、ハレルヤー！」

というわけです。未完成交響楽というのがある。人間的に完成したものは大したものではない。本ものは未完成です。

3 エホバはなんじがすべての不義をゆるし、

汝のすべての疾やまいをいやし、

素晴らしい言葉だね。「なんじのすべての不義」とは何ですか。すべてとは、いろいろ数えるのですか。数えたつてしようがない。

「汝の不義そのものを、不義なる汝そのものを、ゆるしたぞ。病弱そのものなる汝をいやすたぞ」

ということですよ。

柳宗悦氏という人がいます。素晴らしい芸術論者で同時に宗教的境地のわかっている人です。宗悦のものを読んでいると楽しい、本当の世界でものを言っているから。あれが本当の芸術鑑賞家だね。聖書はそういう意味から言っても、素晴らしい文学なんです。

しかし、いわゆる文学ではない。いかなる文学も聖書にはかなわない。カーライルが

「イザヤ書40章になつものがあるか」

と言っているくらいです。イザヤ書40章は素晴らしいところだ。

「汝の不義そのものを、不義なる汝をゆるした」

と、私はそういうようにピシャツとつかまえないと気がすまない。不義そのもの、罪びとそのもの、ということ。パウロが、

「我は罪びかしらとの首なり」

と言った。内村鑑三が戦場ヶ原で人と語った中で、

「私は罪びとの首である。私が救われたから万人は救われる。私みたいな奴が救われたのだから、誰だつて救われる」

という言葉がある。さすがは内村先生らしい。自分自身がなかなかやつかない方だった。先生は自分をもてあましていたものだから、十字架でなければどうにもならない。内村先生にとっては、十字架は決して単なる観念ではもちろんない。ただ、十字架止まりだったのが惜しい。もちろん、聖霊のことを仰らないわけではないけれども、そこに無教会の限界があつた。

「どんなに病んでいても、病んでいないよ。もう癒したよ」

と。いろいろ調子の悪い方がいらつしゃつても、決して悲しまないでください。



「本当の現実では自分はいやされている。こんな病気なんか問題にしていんだ」というようなところに入ってください。私は祈る時にその角度から祈る。「ここを癒してください」ではない。

「どうぞ、キリストの御生命がこの全身に入ってください」

と祈る。そうすると、自然にその局部が治る。単なる局部的な癒しの祈りをしてません。指が一本おかしければ、全身がおかしい。それくらい生命はつながっているんだから。

● 贖われたところに聖霊が来る

4 なんじの生命^{いのち}をほろびより贖^いいだし、
仁慈^{いつくしみ}と憐憫^{あわれみ}とを汝^{みづか}にこうむらせ、

5 なんじの口^{くち}を嘉物^{よきもの}にてあかしめたもう。

斯^{わかや}てなんじは壮^{あたら}きて驚^{あたら}のごとく新^{あらた}になるなり。

5 節もいいね。

「口^{くち}を嘉物^{よきもの}にてあかしめたもう」

これは新約の中にもある。新約では「よきもの」とは聖霊のことです。ルカ伝のところには、
「よきものを賜^{たま}わらざらんや」

と書いてある。マタイ伝では「聖霊」と書いてある。聖霊に比較できるものは一つもない。聖霊は最大の最高のよきものです。聖霊と取り替えるものは一つもない。ありがたいです。十字架が土台になっている聖霊ですよ。十字架の土台のない聖霊は危ない。「十字架・聖霊」は絶対に切り離してはいかん。贖^いわれたところに聖霊が来るので、贖^いわれないところには聖霊は来ない。何となれば、キリストは弟子どもと一緒にいたときに、聖霊を与えなかった。

「私が地上を去つたら、そうしたら、祈つて待つていろ、聖霊をください。十字架の贖^いいなしには聖霊はやらないぞ」

ということなんです。あれをいい加減に読んで困る。そういうことになっている。瞬間的には使徒たちに聖霊の働きをさせたが、あれは瞬間的な話だ。そんなものではない。

洗礼のヨハネがバプテスマをしていた時に、キリストも一緒にバプテスマを受けた。

「いや、あなたはそんなことをなさる方ではない」

「いや、私も受ける」

と。我々と同じ罪びとの姿にキリストはなつて、そうして受洗した。立ち上がったら、聖霊が鳩のごとくに彼に臨んだ。悔改めの必要のないキリストが我々と一緒に立ち帰りの洗礼を受けて、そして立ち上がったら、キリストにだけは聖霊が臨んだ。もう、はつきりしてます。ちゃんとその構造をキリストは事実をもつて現された。

これはイザヤ書40章と相通^{みち}ずる言葉です。

「²⁷ヤコブよなんじ何故にわが途^{みち}はエホバにかくれたりというや。イスラエル



よ汝なにゆえにわが訟えはわが神の前をすぎされりとかたるや。²⁸ 汝しらざるか聞ざるかエホバはとこしえの神、地のはての創造者にして倦^{うみ}たもうことなく、また疲れたもうことなく、その聡明^{さとし}こと測りがたし。²⁹ 疲れたるものには力をあたえ、勢力^{いきおい}なきものには強きをまし加えたもう。³⁰ 年少^{としわか}きものもつかれてうみ、壮^{さか}なるものも衰えおとろう。³¹ 然はあれどもエホバを俟望^{まちのぞ}むものは新なる力をえん。また鷺のごとく翼をはりてのぼらん。走れどもつかれず、歩めども倦^{うま}ざるべし。」（イザヤ40・27〜31）

「待ち望む」というのは待つて望むのではない。「信頼する」ということ。

「エホバを信頼するものは新なる力をえる」ということです。

●無き者

コリント前書1章の26節から、

「²⁶ 兄弟よ、召^{めし}を蒙^{こうむ}れる汝らを見よ、肉によれる智^{かしこ}き者おおからず、能力^{ちから}ある者おおからず、貴きもの多からず。²⁷ されど神は智^{かしこ}き者を辱^{はづか}しめんとて世の愚かなる者を選び、強き者を辱めんとて弱き者を選び、²⁸ 有る者を亡さんとて世の卑しきもの、軽んぜらる者、すなわち無きが如き者を選び給えり。」（コリント前1・26〜28）

この「無きが如き者」というのは

「タ メー オンタ」

といって、「無き者」と直訳していいわけです。

「無者を選んだ」

「何者でも無い者を選んだ」

ということです。ドイツ語でいうと、「デア ニツヒツ ザイエнде」です。愚かなる者、弱き者。そういう者は——キリストが選んだ漁夫たちだつて皆そうでしょ——「ついて来い」と言ったら、みな網を繕つていようが、魚を採つてようが、

「直ちに止めて直ちに従った」

と書いてある、特にマルコ伝は。素晴らしい。キリストの権威ある言葉が発すると、もう前後左右を考えないで直ちに従った。あれが本当の信の世界だ。正に信じ行くという信行です。

「網を棄てて、直ちに従えり」

と書いてある。あれは皆キリストの直弟子だ。

毎日の生活で、或る時に祈るでしょ、それも祈りだけでも、何をしていても、パツと目をつぶつて祈りの世界に入る。そうすると、御声が——何も私は神秘的なことを言つて



いるのではない——確かにはつきりと聞こえてくる。それを聞くことの現実、やはり自分が無にされている時です。こちら側に何か自分の常識や判断をそこに残しておいたらダメなんです。

だから、「聞く」とか「信ずる」ということは、己を否定してかかっている。自己否定です。マイナスにプラスがやってくる。信仰の世界は、

「こちら側も大分プラスだが、それにプラスがきます」

なんて、そうではない。こちら側はマイナスだ。己の知識、判断、経験——それを私はただ無視しているのではない、それはそれぞれの意味があります——しかし、御声に従う時には、そういうものを考える必要はない。パツとくる。正に、即時断行なんです。それは必ず成ります、勝ちます。超常識の世界です——非常識ではない。非常識ということはいいことではない——超常識の世界です。

ニーチェが「超人（ウィーバーメンシュ）」と言った。あなた方は皆キリストにあつては超人なんです。平凡でありながら、超人なんです。平凡にして非凡の世界です。

これが、

「汝の口をよきもの、聖霊で飽かしめ給う」

ということ。充足する。飽きるというのは「飽きてしまった」という飽きるではなく、「満たす」ということです。

●出我

6 エホバはすべて虐げらるる者のために

ただしき 公義と審判とをおこないたもう。

私もさんざん虐げの立場に入りました。除け者にされた。私を「おかしい」と言うなら、なぜ使徒たちを「もつとおかしい」と言ってくれないのか。使徒たちのおかしさはそれはケタが違う。

「神の為には狂えりなり」

とパウロは書いている。キリストにある超人が一番本当のことをする。理性・悟性・感情・意志、それを全部統括しているのはこの聖霊の世界です。相対的なよきものを統括してこれを善用するのは聖霊の力であり、智慧である。だから、

「聖霊は凄い」

と言っている。我々がたまわっているいろいろな賜物は、性格だとか、能力だとか、それは全部、聖霊が最も素晴らしく善用なさる。女の方が裁縫をしようが、台所の仕事をしようが、何をしていても違うんです。楽しくて本当のことができる、というわけです。

「虐げらるる者のために公義と審判とをおこないたもう」

と。正しき審判はなかなか来ないかも知れません。地上にいるうちに来ないかも知れない。



いいですよ。そのことは詩篇の139篇の、

「汝知りたもう」

の一言でたくさんだ。

「あなたはご存じです。それで結構でございます。どう扱われようが、どう人に思われようが、結構でございます」

と。そして、虐げられた者や弱き人たちの味方となって助けてあげる。愛するとは人助けをするということです。感情で愛することではない。或る時は、食べ物をあげたり、いろいろな具体的ことがある。要するに、愛するとは人助けをすること。

「喉の渴いている者に水をやらなかったらダメだ」

とキリストは言っている。

7 おのれの途をモーセにしらしめ、
おのれの作為をイスラエルの子輩にしらしめ給えり。

出エジプトの事が一番この時、考えられているのでしようね。大変なことだ、あの出エジプトは。出エジプト、出バビロニア。私たちは何かというと、出我です。己を出す。

「己を棄て、己が十字架を負いて、我に従え」

という「己を棄て」が出我です。「棄身の態勢」ということ。何でも棄身の気合で行ったら凄いことになる。

私たちもみなキリストの御業を体験しているでしょ。「あの時は危なかったけれども」と。私もこないだ危うく自転車であつかりそうになった時だ、

「主さま！ ありがとうございます！」

と平伏したよ。そういうことが時々ある。「ああ、危なかった」ではない。キリストに平伏さなければいかん。

●旧約の福音

8 エホバはあわれみと恩恵にみちて

怒りたもうことおそく仁慈ゆたかにまします。

旧約にこういう言葉があるから、旧約の福音と言っている。

「憐れみは審判に勝つ」

という言葉が新約の中にもあったね。憐れみが審判に勝っている一番凄いのはキリストの十字架です。私たちが神さまに審判されたら、みな殺されてしまう。ところが、キリストが代わって十字架にかかられた。私たちのために、

「彼らを赦してやってください」

と。歴史的の「彼ら」ではない。私が、キリストを十字架に架けた「彼ら」の一人だから。

「そのゴルゴタの十字架は正に私のためでありました！ アーメン！ 主さま！



ありがとうございます」

と。もう、先が言えない。十字架は軽々しく言える言葉ではない。

9 恒^{つね}にせむることをせず

永遠にいかりを懷^{いだ}きたまわざるなり。

暖かい言葉だ、こちらの罪のかさに従って考えない。エレミヤ記には「罪を忘れる」と書いてある。既に贖われたから。イザヤ書の中にも素晴らしい言葉がある。イザヤ書44章22節、

「21ヤコブよイスラエルよ此等のことを心にとめよ。汝はわが僕なり我なんじを造れり。なんじわが僕なり。イスラエルよ我はなんじを忘れじ。22我なんじの愆^{とが}を雲のごとく消し、なんじの罪を霧のごとくにちらせり。なんじ我にかえれ我なんじを贖いたればなり。」（イザヤ44・21・22）

「帰れば、贖うよ」ではない。

「もう贖われたから、帰ってきなさい」

ということです。これは非常に大事な言葉です。僕というものはこのようにして顧みられている。我々はキリストの僕、婢^{はしため}、或いはキリストの兵士、戦いの勇士^{つわもの}です。世界の最大の勇者はイエス・キリストです。本当の勇者だから、十字架に架かった。でなければ、架かれない。弟子たちも散ってしまった。ペテロもキリストを否んだ。

「大丈夫、今にもどつてくるよ」

と先を見ているんだ、キリストは。キリストの十字架は天涯孤独です。本当の怒りは愛の別な形なんです。憎しみの怒りではない。義の叫びです。義の叫びの奥には愛がある。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまいし」

というあの義の叫びがあつたから、後でキリストは、

「彼らをゆるしてやってください」

と、こうなっている。神の御意を完全に行じたキリストは義人ですから、

「なぜ、この私をお棄てになるか」

というのが義の叫びです。

「神と私のこの関係が切れたら、どうなさるんですか」

と。地球の地軸以上だ。地軸が折れてしまう。けれども、その義の叫びがあつたからこそ、本当のゆるしの祈りがそこにある。憐れみは最大の力です。

●エホバに平伏す者

10 エホバはわれらの罪の量^{かさ}にしたがいて我等をあしらいたまわず、

われらの不義のかさにしたがいて報いたまわざりき。

素晴らしい言葉だね。大きなゆるしをもって見ていらっしゃる、というわけです。申し訳ないのにさっぱりお審きなされない、と後になってから、御前に本当に平伏すわけです。



怒りよりもその方が素晴らしい力を持っている。

11 エホバをおそるるものにエホバの賜うそのあわれみは大いにして、

天の地よりも高きがごとし。

この作者たちは何かの体験をもつて言っているから人を打つ。頭でものを言っていない。

12 そのわれらより愆^{とが}をとおぎけたもうことは

東の西より遠きがごとし。

いやいや大変なことだ、と。「人生、意気に感ず」というけれども、

「人生、神の赦しに感ず」

という。全部、私たちにとつてこれはキリストです。

教会ではよく『主の祈り』をやっている。私はあれをやる気がしない。それは、キリストは、

「天にまします我らの父よ」

でいい。けれども、私にとつてはキリストは完全に贖主ですから、

「主さま！」

と言うより他に言いようがない。主さまの後ろには神さまがいらっしゃる。しようがないよ、私は主が一切だから。これは文学としても素晴らしい表現だ。決してただ修飾的に言っているのではないけれども、現実の言葉です。

「こんなに問題にしないでくださったか、そんなにしてまで赦してくださいましたか」ということです。だから、旧約の福音だと言っている。

13 エホバの己をおそるる者をあわれみたまうことは

父がその子をあわれむが如し。

仕方がないから、「父がその子をあわれむが如し」なんて言っているけれども、これは本当はあまり比喩にならないんだ。

「エホバの己をおそるる者をあわれみたまうことは父がその子をあわれむよりも遙かに素晴らしい」

と本当は言わなくては。「おそるる」は「畏るる」と書かなくてはいけない。恐がる恐れではない。畏れかしこむことです。私は「おそれる」なんて言いたくない。

「エホバに平伏^{ひれふ}す者」

と言いたい。畏れの心の姿は平伏し、「御前に平伏す者」です。跪^{ひざまず}くどころでない、平伏す。

「キリストの己の前に平伏す者をあわれみたまうことは父がその子をあわれむよりも遙かに素晴らしい」

ということです。パウロのコリント書翰の中に、

「儀文は殺し、霊は活かす」

とある。

「その言葉の本当の現実是这样いことだ、言葉にとらわれた読み方をするな、そ



の奥の神の根源語の響きを受けとれ」

というわけです。ルターは、

「聖書はまだかけらに過ぎない」

と或る所で言っている。

「神さまの言はまだ無限にあるので、聖書は全き書だというわけではありませんよ」という。さすがは、聖書を訳したルターはそんなことを言っている。

「キリストの聖言は限りなく、とても載せきれない」とヨハネ伝の終りの方に書いてある。

●一人ひとりが神と直結する

14 エホバは我等のつくられし^{さま}状をしり、
われらの塵なることを念^{おも}い給えばなり。

これは創世記の神話のところですよ。土（アダマ）をこねてアダムを造って、

「息を吹き入れたら、生ける者となりぬ」

なんて書いてある。

15 人のよわいは草のごとく、

その栄えは野の花のごとし。

これもイザヤ書40章に出てくる言葉ですよ。ペテロもペテロ前書でこれをまた書いてます。

16 風すぐれば失せてあとなく

その生^おい^はい^かでし^な処にとえど尚^{なお}しらざるなり。

まことに儂^{はかな}い。仏教的な無常だ。諸行無常だ。「人生の旅路半ば」とは何歳ですか。詩篇90篇に出ている。

「10 われらが年をふる日は七十歳にすぎず、あるいは壮^{すこ}やかにして八十歳にいたらん。されどその誇るところはただ勤労とかなしみとのみ その去りゆくこと速^{すみ}かにしてわれらもまた飛去れり。」（詩篇90・10）

だから、「人生の旅路半ば」というのは35歳ですよ。ダンテの『神曲』の一番最先に出ている。「人生の旅路半ばに、自分は暗き林の中に迷っていた」と。

17 然^{しか}はあれどエホバの憐憫^{あわれみ}はとこしえより永遠まで、

エホバをおおるるものにいたり、

その公義^{ただしき}は子孫のまた子孫にいたらん。

「子孫のまた子孫にいたらん」と、それはありがたいことだけれども、今は、お父さんの信仰を本当に継いでいくような子が少ない。この頃は三代続かないようだな。信仰は一人ひとりが神と直結する世界ですから。

「アブラハムの末だなんて言っちゃダメだぞ、石ころからアブラハムの末を



起こすぞ

なんてキリストが言われたのはそのことです。

「血統的な伝統を問題にしているいい気になっているな」ということです。

「各民族は神に直結する」

とは或る歴史家が言った言葉です（レオポルド・フォン・ランケ 1795～1886『近代史の主要時代』。各人、各社会、各民族、各国家が、それぞれの存在は使命があるから、お互いに尊重しながら仲良くやっていこうと、なぜ、それができないか。人間というものはしょうがないものだ。キリストの前に平伏すまではダメなんだな。

●信即行

¹⁸その契約をまもり

その訓諭を心にとめて行うものぞその人なる。

「神の御意を行う者ならずば天国には入れない」

と、キリストがはっきり言われた。

「信仰さえあればいい」

なんて言つて、行為がいい加減になつてしまつたら、とんでもない話だ。福音書を見ると、彼らは皆もの凄く身体をはつて、棄身の気持で行じている、信じ従っている。

「その信仰は行為を持っているか」

なんていう、二段構えの考え方ではない。「信即行」の世界、「即」の世界です。信仰そのものが身体で現れないような信仰は信仰ではない。どんなにその行がみじめな行であつても、魂の底から本当にやっていることは、それが即行、行即信、信即行です。

カトリックは、

「信仰だけではいけない、行為をもつとせよ」

と大に行行為を尊重する。プロテスタントは、

「そうではない（信仰だけでいい）」

と言う。そうではないんだ。いわゆるカトリックでもないけれども、福音書の世界は本当に行じている世界です。信仰の人パウロが最も素晴らしい行者である。ルターもそうだ。彼も本当に「殺されても」と言つて、ルターはやった。皆さん、そういう、生き生きとしたキリストの力を光を現ずるところの存在として進んでください。

「汝らは世の光なり。地の塩なり」

とはそのことです。口でばかり信仰のことなんか語っていたつてどうにもならん。行に裏付けられない信仰の話はダメなんだ。倫理の世界でも、倫理の先生は自分で本当に実行していなければ、本当は倫理の講義はしてはいけない。それは、人によつて生まれつきでい



ろいろですよ、けれどもとにかく、その気合をもつて生きていなければダメなんです。私は結果を言っているのではない。その姿です。

19 エホバはその寶座^{みくら}をもろもろの天にかたく置^{すえ}たまえり、
その政權^{まつりごと}はよろずのもの^{つかい}のうえにあり。

20 エホバにつかうる使者^{つかい}よ、

エホバの聖言^{みことば}のこえをきき、

その聖言をおこなう勇士^{ますらお}よエホバをほめまつれ。

「聖言を体現している者よ、いよいよ讃美せよ」

と。体現そのものが讃美だ。こういう聖句を読んでいて、読みながら力が来なければ本当は読んでいるというわけにはいかない。私は集会をした後は力が来ていてしょうがない。「お疲れさま」なんて何をおっしゃるか。「お疲れさま」どころでない。力が充満しています。あなた方も聞きながら、充満していなければ、聞いているかいがない。「先生はそうかも知れないけれども」なんて、そうではない。みな同じことです。「正に然り」と言わなくては。

●讃美せざるを得ない

21 その万軍^{みことろ}よ、その聖旨^{しもへち}をおこなう僕等^{しもべら}よ、

エホバをほめまつれ。

22 その造^{まづ}りたまえる万^{よろず}物^{もの}よ、

エホバの政權^{まつりごと}の下なるすべての処^{ところ}にてエホバをほめよ、
わがたましいよエホバを讃^ほめまつれ。

23 天^{あめ}ようたえエホバこのことを成したまえり。

下なる地^ちよばわれ、

もろもろの山^{やま}よ林^{はやし}およびその中の木^きよこえを^{はな}発^{はな}ちてうたうべし。

エホバはヤコブを贖^{はな}えり。

イスラエルのうちに栄光^{はな}をあらわし給わん。

「讃美せよ、讃美せよ」と書いてある。「詩篇」は「讃美歌集」だと言ったでしょ。

詩篇148篇を見てください。

「エホバをほめたたえよ。もろもろの天よりエホバをほめたたえよ。
もろもろの高所^{たかし}にてエホバをほめたたえよ。……

と、ここにたくさん書いてある。しかも、

8 火^{あられ}よ、霰^{あられ}よ、雪^{ゆき}よ、霧^{きり}よ、みことばにしたがう狂風^{あらし}よ。

9 もろもろの山^{やま}、もろもろの丘^{かみ}、実^みをむすぶ樹^き、すべての香柏^{かひ}よ。

10 獣^{けだもの}もろもろの牲畜^{けだもの}、はうもの、翼^{はね}ある鳥^{とり}よ。

11 地の王^{みかど}たち、もろもろの民^{たみ}、地の諸侯^{しこう}よ、地のもろもろの審士^{しんし}よ。



12 少きおのこ、若きおみな、老たる人おさなきものよ。

13 みなエホバの聖名をほめたたうべし。

その聖名はたかくして類なく

その栄光は地よりも天よりも上にあればなり。

14 エホバはその民のために一つの角をあげたまえり。

こはそのもろもろの聖徒のほまれ、

エホバに近き民なるイスラエルの子輩のほまれなり。

エホバを讃称えよ。」(詩篇148・1〜14)

と、たくさんならべて全部書いてある。148編、149編、150編は全部もの凄い讃美の詩篇です。こちらがどんな状態でもいいから、どんな環境に置かれてもいいから、ただ讃美する。讃美せざるを得ない。その讃美の世界では、環境に必ず勝っている。

●詩「羔の血を」

讃美歌『羔の血を』歌わせてもらいます。これは自分で作った讃美歌の一番好きな詩の一つ、或いは一番好きな詩とっていいかも知れません。

召団讃歌A15 「羔の血を」

(1980年10月16日作 田中穂積作曲「美しの天然」の曲で)

1 羔の血を 身に浴びて

あがなわれたる

白き群

苦難経たる

生涯ゆえ

栄光ゆたけき

御座の許

2 神の幕屋の

張られたる

その天然の

霊泉に

渴きを知らぬ

永遠の

生活たのしむ

パラダイス

3 数えつくせぬ

国民の

星と散らばる

幕屋かな

類は相呼び

集りて

主のエクレシヤ

ここに成る

4 我らも地にて

聖名ゆえに

十字架を負いて

生き貫かん

み霊の光

身に浴びて

主のみ生命を

身証せん

